

英語に苦手意識を持つ学生を対象とした アクティブラーニング実践報告

榎山桐加（熊本大学）

キーワード：英語、アクティブラーニング、グループ学習、Project Based Learning

これまで英語学習に苦手意識を持つ学習者が多いクラスで英語スピーキングの授業を担当し、動機づけ、基礎力共に低い学生がまずは「英語は楽しい」と感じられるよう様々な工夫をこらしてきた。昨年度は、3年前から取り入れたアクティブラーニングをさらに進化させ、プロジェクトベースラーニング（PBL）に取り組んだ。

【先行研究】 英語の熟達度の低い大学生を対象に英語を教える場合、一般的に中学レベルの文法の復習など、基礎力をつける内容を授業に取り入れることが多いが、中学や高校の段階で既に、英語の授業に否定的な見解を持ち、英語嫌いに陥っている学生に、基本のやり直しに時間を割くことは英語嫌いを助長することになりかねない（永井, 2010, P227）。「言語に触れること」、「言語の使用」、「動機」という条件を蔑ろにしたまま文法ルールを繰り返し教えることは言語学習の本質を欠く（長尾, 2010, P147）。日本社会のように日常生活で英語を実際に使う機会が乏しい環境の中で、現実感を持って将来自分が英語を使いこなしている姿を想像することは容易なことではない（大和・三上, 2012, P16）。自己学習だけでは意欲や学習効果を高めることが難しいため、コミュニケーションを中心とした様々な課題に取り組ませることにより、英語を学ぶ楽しさと、学習の効果を実感させるのが望ましい（牧野, 2013, P113）。実際に英語を使わなければならない状況を創り出し、個人ではなくグループで助け合う仕組みを取り入れることは、英語学習に苦手意識を持つ学習者が英語の授業に前向きに取り組むための一助になると考えられる。

【方法】 英語でコミュニケーションをする必然性を創り出すため、海外に向けて日本の情報を発信する動画を製作し、インターネットで公開することにした。その際、日本の文化や生活様式などについては既に数多くの情報発信がなされていることから、ほとんど情報発信されていない分野として最新の日本の若者言葉を英語で解説するという内容で動画を制作することにした。意味や用法の解説と実際に使う状況を演技して再現することを条件に、4人1組のグループで制作に取り組んだ。

【結果】 解説する言葉は各グループで重ならないように決定させるなど、学生が自ら選択する場面をできるだけ多く設けるようにした。動画制作という最終目標に向け、授業の各回は原稿作成、使えそうな英語表現の収集、英訳、発音練習など、学生自らが授業の目的

を明確に理解して積極的に取り組んだ。これまで教室内にとどまる発表では、笑いをとるためにわざと日本語を混ぜるなど、英語の授業としては歓迎できない状況が多く見られたが、海外に向けて情報発信するという状況が作り出せたせいか、細部までこだわって英語で表現しようという姿勢もみられた。授業の感想として、「斬新な授業だった」「楽しかった」という感想にとどまらず、「いい思い出になった」「なかなかできない経験ができた」など発表者が今までに実践した授業では見られなかったコメントも寄せられた。

学生が制作した英語による日本の若者言葉の解説動画（一部）



【参考文献】

- 永井典子（2010年）『総合英語プログラムの全学導入と新たな挑戦』／山岸信義・高橋貞雄・鈴木政浩 編集『英語教育学大系 英語授業デザイン 学習空間づくりの教授法と実践』第13章／大修館書店
- 長尾知子（2010年）『タスク中心の指導法における授業実践事例』／山岸信義・高橋貞雄・鈴木政浩 編集『英語教育学大系 英語授業デザイン 学習空間づくりの教授法と実践』第13章／大修館書店
- 大和隆介・三上由香（2012年）『日本人英語学習者の動機づけに関する調査と考察:L2動機づけ自己システムの観点から』
http://ksurep.kyoto-su.ac.jp/dspace/bitstream/10965/985/1/TPRB_7_1.pdf（2013年12月15日）
- 牧野眞貴（2013年）『英語スピーチにおける協同学習の有効性—リメディアル教育を必要とする大学生を対象として』／近畿大学教養・外国語教育センター紀要 外国語編